

明治あやかし婚姻譚
～八咫鳥の花嫁～

たかつじ楓 Kaede Takatsuji



アルファポリス文庫

鈴虫が鳴く薄闇の中、その男は立っていた。

細い小川が流れる土手べりで、松の木の幹に背中を預け、腕を組んでいる。

黒く長い髪を一つに結び、藍色の羽織を着ており、夜風がその髪と裾を揺らしていた。

男は一人静かに月を見上げていたが、ふと川へ視線を落とし、川の中の大きな岩の影を見つめる。

幹から体を離し、草履の足で音もなく川へと歩むと、手を伸ばしてその岩に引っかかっている細い棒を拾い上げた。

冷たい水に濡れたそれは、鼈甲の簪だった。

花の飾りがついており、若い娘が髪を彩るためのものだろう。

男は長い指でその簪かんざしを撫でる。

「——ここにいたのか」

切れ長の目をそっと細め、ずっと探していた宝物を見つけたかのように、大切そうにそれを袂たもとへとしまった。

彼の低い呟きは誰にも届かず、川のせせらぎにかき消されてしまう。

そうして踵かかひすを返すと、藍色あいらろの羽織ひるがえを翻し、その簪かんざしの持ち主の元へと向かったのだった。

第一章 疫病神の本懐

「強く気高い子になりなさい、綾子あやこ。どんなに辛いことがあっても、笑顔でいるのよ」
幼い頃、母はそう言って私の髪を撫でた。

私の黒い髪を、椿油を染み込ませた櫛くしで梳とかしながら、母は優しく囁ささやいた。

「大きくなったら、どんな人のお嫁さんになるのかしら。楽しみね」

日の当たる縁側に二人で座り、細い指で私の髪を編み上げ、娘の将来を心から楽しみにしている母。

そんな母の嬉しそうな顔を見ながら、大人っぽく髪を結ってもらえた嬉しさから、手鏡を持ったまま母に抱きついてしまった。

母は裕福な商家の父の元に嫁とつぎ、その美しさと器量の良さから、老若男女に愛される人であった。

透けるような白い肌には藤柄の着物がとても似合っていて、落ち着いた話し方や立

ち居振る舞いは、女中たちがみな憧れている。

そんな母を私は大好きだったし、誇りであった。

母のように、みんなから愛される女性になりたい、と幼心に思ったものだ。

そんな私が十歳になった頃、ある変化が起こった。

「綾子ちゃん、甘い柿が生りましたよ。一緒に食べようねえ」

庭で鞠で遊んでいた私は、柿を剥いて持つてきてくれた祖母の丸い背中後ろに、黒い影を見たのだ。

不気味な影をじっと見つめていると、影もこちらを見ているかのような、そんな薄ら寒い気持ちになるのに、どうしてか目が離せない。

どうかしたの？ と不思議そうに手招きする祖母に何も言えず、剥いてくれた柿を食べたのだが、そばで蠢く黒い影に気を取られ、味が少しもしなかったのを覚えている。

「おばあちゃんの後ろに、黒い影がいるの。ずっとついてるよ」

その晩、湯浴み上がりに母に髪を梳いてもらっている時、何の気なしに話してみた。

不気味で気持ち悪いことをわかってもらいたかっただけなのだが、母は櫛を持つ手を止め、はっと息を呑んだ。

「綾子。それは他の人の前では、絶対に言っては駄目よ」

私の正面に回り込んできた母は、両肩を掴み、私の瞳を覗き込んで真剣な声で言う。

「わかった？ 他言無用よ」

普段優しい母の剣幕に、私は驚き慌てて首を縦に振った。

じつと心配そうに私を見る母の目に映った、不安げな自分の顔。

「ああ、なんてこと。恐ろしい……！」

母はそう呟くと、震える腕で私を強く抱き締めた。

普段優しい母が、眉を顰め、唇を引き締め顔を歪めているのを見るのは初めてで、私は何かすごく悪いことを言ってしまったのかと悲しくなり、それ以降、黒い影のことは口にしないようにした。

母がすぐに医師を手配し祖母を診てもらうと、病が見つかり、祖母はその後あっけなく逝ってしまった。

腎臓に石があったらしい。

床に伏せた祖母は、ずっと背中が痛い、背中が痛いとうわごとのように眩いていた。白い布を顔に被せられ、冷たくなり布団に横たわる祖母の姿の前で臨終たと手を合わせる医師の言葉に、親族は皆涙していたが、私はあの日、柿を剥いてくれた祖母の背中に纏わりついていていた黒い影のことがずっと忘れられなかった。

つい最近まで元気に家事をしていた祖母が、痩せ細って苦しみながら亡くなってしまったことが、恐ろしくてたまらなかった。

啜り泣く声が響く和室で、隣に正座する母の顔を盗み見たところ、母は私に向かって小さく首を横に振る。

『何も言うな』と、伝えているようだった。

祖母の死以降、不思議な影が見えるようになってしまった。

それはいつも見えるわけではないのだが、ある日は町に出た時、気のいい店の主人の足に影が纏わりついているのが見えた。

子供を身籠った若い女性の、大きなお腹の周りに影があったこともある。

母に手を引かれながら、「口に出してはいけない」という約束を守り、私は不気味に思う気持ちを呑み込んでいた。

するとしばらくして、店主は膝が悪かったせいで庭木の剪定中に屋根から落ち、亡くなったという話を聞いた。

若い女性の子供は、生まれた時に産声をあげなかったらしい。

黒い影は、死の世界へと誘う悪霊なのではないか。

死の気配に近寄り、纏わりつく影が恐ろしくて、いつしか私は外へ出ることさえ億劫になってしまった。

祖母の死から一年後、母は法事のため京都の実家に帰省することになった。

幼い私に長旅は大変だろうと、一人で行く代わりにお土産を買ってくると約束してくれた。

あまり外に出たがらない私に、気を遣ったのかもしれない。

翌朝早く、戸を開けた音で私が目をこすりながら布団から起き上がると、出かける身支度を済ませ風呂敷を持った母は笑顔で手を振ってきた。

「じゃあね、綾子。お土産楽しみにしててね」
寝ぼけていたので見間違いか、夢との狭間ならばよかったのだが。

久々の帰省に心を躍らせているのか、上機嫌に父に手を引かれ馬車に乗る母の頭から胸にかけて、大きな黒い渦が取り巻いていたのだ。

「お母、さん……！」

私は咄嗟に声をあげるも、他言してはいけなと言われてた手前、父や女中たちが軒先に集まっている状況で言っては駄目だという思いが一瞬よぎってしまった。

言葉を呑み込むと、母はもう一度笑顔で手を振り、小気味よく蹄の音を響かせて馬車は出発してしまった。

そして嫌な予感の中する。

母は、その夜冷たくなって帰ってきた。

季節の変わり目で、突如夕立ちが降った日だった。

ちよほど足元の悪い砂利道の崖近くを通っていた時、興奮した馬が足を滑らせ、馬

車が横転したらしい。

乗っていた母は馬車の中から振り落とされ、崖の下へと落ち、強く頭を打ったという。

「屋敷へと運ばれてきた母の亡骸を見て、私は泣き崩れた。

穏やかな祖母も、優しい母も、二人とも死んでしまうなんて。

「黒い影が頭の周りにいたの……！ 私が、私がお母さんに伝えていれば！」

額から血を流し、錦織の着物を着た母親に縋りつきながら、私はわんわんと泣いた。

「おばあちゃんの背中にも見えたの。そしたらすぐに死んじゃった……！」

絶対には言っていけないと言われていたことを口にした途端、後から後から悔しさが湧き上がってくる。

背中についた影を見て、すぐに祖母を医者に連れていけば助かったのか？

頭に黒い渦が巻いていた母に、行かないでと言えよよかったのか？

幼い私にはわからなくて、でも悔しい気持ちと、ひとりぼっちになってしまった寂しさが、どうしようもなく胸を埋め尽くしていたのだ。

そうやってわんわんと泣く私を抱き締めて、髪を撫でてくれる人はもういなくなりました。

裕福な商家の主である父は、母を愛してはいたが、母亡き後はいつまでも独り身ではいけないという周りからの後押しもあり、後妻を迎えた。

ちょうど病で夫を亡くしたばかりだった後妻には、私の二つ下の女の子の連れ子もいて、私には義理の母と義理の妹ができた。

それから私は、「疫病神」と呼ばれるようになった。

優しかった祖母と母の亡き後、私の居場所など、この屋敷にはない。

私に関わった人間はみんな死んでしまう、不吉な疫病神だと。

* * *

桶の中の襦袢じゆばんを水につけ、擦こすり洗う。

額からは汗が流れ、指先はあかぎれをして見るからに痛々しい。

綾子は袖をたくし上げ、ごしごしと桶いっぱいしのみやの着物を水につけ、洗っていく。

篠宮家の屋敷の裏、広い庭の端で、人目から隠れるようにしやがみ込み、洗濯に精を出している。

額の汗を拭ぬぐった時、後ろから影が落ちたので綾子は振り返った。

「まだ洗濯してたの？ もう日は高く昇ってるじゃない」

鼻で笑い、綾子を見下ろしてくるのは、義妹の絹江きぬえだ。

蝶々柄の明るい色の着物を着て、肩まで伸びた焦茶色の髪を靡なかせて悠然ゆうぜんと立っている。紅を引いた唇と、その下の口元のほくろが印象的な利発なそうな少女だ。

綾子の母が他界し、父が後妻と再婚してから八年の時が経ち、綾子は二十歳、絹江は十八歳に成長していた。

「……すみません、汚れが落ちなくて」

両親や義妹だけでなく、女中や使用人の服や布、全てが桶に入れられているため、一人では洗うだけでもなかなか骨が折れる。

「言い訳なんて聞きたくないのよ！」

絹江は顔を擧め、桶の前にしゃがんでいる綾子の肩を強く押す。ばしゃん、と水音が響き、洗い物の入った水桶と共に綾子が体勢を崩し地面に横たわる。

「あーあ、また汚れちゃったじゃない。水汲んできて洗い直しなさいよ」
せつかく綺麗に洗ったのに、再び泥がついた洗い物を見て、絹江は忌々しそうに言いつつ放つ。

綾子は無言のまま、ゆっくりと立ち上がると、絹江に小さく会釈をして桶を持ち水汲み場へと向かった。

後妻の娘である絹江にとって、前妻の娘である義理の姉の綾子は邪魔な存在だった。いつも暗い顔でぼんやりとしているのも苛つくし、絹江はこの家の財産をいずれ全て自分のものになりたいと思っていたからだ。

堂々として、女学校でも中心的存在の絹江にとって、不吉な義姉など、鬱陶しくて仕方がない。

ふと、地面に簪が落ちてるのが目に入った。

絹江は膝を折りそれを拾うと、後生大事に綾子がいつもつけているものだと気がつ

いた。突き飛ばして転んだ時に、髪から落ちてしまったのだろう。

「ふん、疫病神の分際で、ずいぶん立派な簪つけてるじゃない」

絹江は物珍しそうにその鼈甲の簪を眺めた後、しかし自分の持っているものの方が立派だと鼻で笑うと、通りかかった女中に話しかけた。

「これ、いらぬから川にでも捨ててちょうだい」

そう言つて、桶を持って惨めに水仕事へ向かう綾子の背中を見てせせら笑った。

* * *

どこに落としてしまったのだろうか。

絹江に突き飛ばされ、再び桶に水を汲み一から洗濯物を洗い終えた後、裏庭の草を刈り、屋敷の床掃除も終え一息ついたところで、ようやく綾子は自分の髪に簪がついていないことに気がついた。

亡き母の形見であるそれは、たった一つの自分の宝物だ。

裏庭も、屋敷の床も、歩いた場所は全て探したが、見つからない。

血相を変えて探し物をしている綾子に、女中たちは不審そうな目を向けるだけ。「ない……どこにも……」

絹江に聞こうと思っただけ、昼過ぎから彼女は女学校の友人たちと遊びに行ってしまったらしい。

掃除の後、塵取りの屑と共に捨ててしまったのか、それともきらりと輝く簪が落ちているのを見て、好奇心旺盛な野鳥が啜えて飛んでいってしまったか。

見つかる可能性は低いが一縷の望みを懸けて、綾子は町中へ出て聞き込みをしようと思った。

ちょうど店じまいをしようとしていた反物屋の女主人に、店先で話しかける。

「あの、簪を見ませんでしたか。鼈甲で、椿の飾りのついた……」

額に汗を浮かべ、小走りで息の上がった綾子を見て、最初は心配そうに話を聞こうとしていたが、綾子の顔を見ると頬を引き攣らせた。

「ひい！ 篠宮家の、疫病神……！」

女主人は恐ろしそうに声を漏らすと、慌てて店の中に入って戸を閉めてしまった。

中から頑丈な鍵をかける音が響き渡る。

綾子は嘩然とし、女主人から浴びせられた言葉に酷く心を痛めた。

よろめく足で次の店の軒先に行くが、その店主の中年男性も眉根を寄せ、しっしと手で追ひ払うし、幼子を抱えた若女将は背中を向け、視線も合わせずそそくさと家中へ入ってしまった。

篠宮家の長女が体のどこかに黒い影を見たら、その者は死んでしまっつ。

悪評が町中に轟いている綾子の話を聞く者など、誰もいなかった。

* * *

数刻、綾子は一人で町中を探し回ったが、結局簪は見つからなかった。

草履の足の指の付け根から血が滲み痛んだため、よろよろと覚束ない足取りで綾子は篠宮家の屋敷へと戻った。

正面の門からではなく、ぐるりと奥に回った裏門から入り、裏庭のさらに端にある、藁葺き屋根の納屋の扉を開ける。

明かりもなく、隙間風が吹くその納屋が、綾子の寢床であった。

篠宮は代々裕福な商家で、手入れの行き届いた池や庭園、檜の香りのする縁側を持つ瓦屋根の立派な屋敷に住んでいるというのに、綾子は一人、この湿気た薄暗い納屋の中で過ごしているのだ。

まるでその存在さえも、人目を憚るかのようにはばか

井草で編まれた薄いござの上に、疲れ果てた体で座り込む。

ひび割れた皿の上に、塩むすびが二つだけ置かれている。

綾子の夕餼だ。彼女は屋敷の中で食事をとることを許されておらず、朝晩、女中が粗末な食事を持つてくるのだった。

置かれて時間が経っているため、蟻が数匹たかっている。

それを払い、冷えた隙間風が吹くおんぼろの納屋で一人、綾子は塩むすびを口に含む。

咀嚼し塩気のある米を呑み込んだ時、ぼろり、と涙が一筋流れた。

涙は後から後から流れてくる。

外からは、絹江の声だろうか。楽しげな若い女性の笑い声と、話し声もする。

きつと絹江と義母が仲良く食事をしているのだろう。その輪に入れない綾子は、薄

暗い納屋でひとりぼっちだ。

父親は買付などで忙しく地方を飛び回っており、月の半分以上家にいない。

血のつながった娘が、後妻とその連れ子からいびられていることに気がついていないわけではないだろうが、前妻を事故で亡くし、娘に疫病神という悪評がついてしまい、汚名返上のため休みもなく必死に仕事をしていて、家のことに構ってられないのだろう。この家に、綾子の味方など二人もいないのだ。

納屋には綾子の背より高い場所に一つ小さな窓があり、そこから月の光が射し込んでいた。

無気力に壁に背を預け、ぼんやりとその月明かりを眺めながら、簪をつけた自分を優しく褒めてくれた祖母と母の笑顔と、頭を撫でる手の温かさを思い出す。

ああ、こんなことなら。

二人の代わりに、私が死ねばよかったのにな。

寒い隙間風に肩を震わせながら、綾子は呆然とそんなことを思った。

裕福な家庭に生まれても、下女以下の下働きをし、ぼろぼろの納屋で寝起きし、人

目につけば疫病神と吐き捨てられる。
 そんな人生に何の意味があるのだろうか。
 月明かりが涙で滲む。

『——きたいか』

どこからか声が聞こえた。

それは、窓のあたりから聞こえた気がした。砂嵐のように聞こえ辛い、耳を澄ませると次ははっきりと聞こえる。

『お前も……母と祖母のいる場所に……行きたいか』

小さな窓から、闇に紛れて霧が入ってきた。

それは納屋に入るとどンドン広がり増えていき、壁中を覆い尽くすような大きな霧となる。

ぞわぞわと変幻自在に形を変えて、まるで人の口や目のような不気味な模様もある。一瞬息を呑んで体を強張らせた綾子だったが、すぐにわかった。

黒い影だ。

病魔に蝕まれた祖母に、事故に遭い命を落とした母に、取り憑いていた黒い影。あの世へと誘う、死の黒い影。ついに自分の元にも現れたのか、と綾子はふと笑ってしまった。

『怖く……ないのか……?』

黒い影の声は、耳からではなく直接頭の中に響いているようだった。

綾子は心の中で返事をする。

怖くはないわ。私も、お母さんとおばあちゃんの元に連れていって。

つぎはぎだらけの着物を着て、あかざれした指の綾子は、何も未練はないと目を瞑った。

『そうか……話は早い……』

黒い影はそう呟くと、綾子の周りを取り囲んだ。

闇に包まれる形になった綾子は、痛みや苦しみを覚悟していたがそんなことはない。生暖かい霧に包まれているのが、なんだか妙に落ち着く。幼い昔、母に抱かれなが

ら眠りにつく時を思い出した。
綾子はそつと息を吐く。

静かに眠るように、消えていけるなら本望だと思つたのだ。心から。
しかし、そんな闇を切り裂く、冷たい声が響いた。

「そこまでだ」

がんと大きな音がしたので綾子が驚いて目を開くと、納屋なやの入り口の木の扉が十字に斬られ、ばらばらに散っているところだった。

厚みのある木の板をいとも簡単に壊し、背の高い一人の人物が納屋なやの中に足を踏み入れた。

背後から月明かりに照らされた青年が、力なく座り込んでいる綾子を見下ろす。

逆光で表情は読めなかったが、彼の鋭い眼光だけが納屋なやの薄闇に輝いた。

「心を強く持て。その黒い影は悪霊だ。人の弱さに付け込み、黄泉よみの世界に引きずり込む、災いだ」

床にしゃがみ込み、黒い影まじに纏わりつかれている綾子に、その青年ははっきりと言
い放った。

「甘い言葉に騙されるな」

母と祖母のことを思い出し一人泣いていた綾子に、二人の元へと行きたいかと聞いてきた黒い影。

あのまま身を委ゆだねていれば、魂を抜かれて眠るように逝いっていたのだと、今の綾子はなぜだかわかる。

青年は腰に差している刀を鞘から抜いた。

綺麗に研がれ、一つの傷もないその刃は、月明かりを受けて切っ先が淡い青色に光って見えた。

『それは退魔の刃……！ 貴様、まさかあやかしの……！』

悪霊は綾子の周りをぐるぐるすると回ると、驚いたような声をあげ、空中に浮かび上がった。

影の中に再び人間の目と口のような模様が浮き出て、言葉の通り口が動く。

不気味な悪霊が、刀を構える青年と対峙した。

「やめ、ろ……！」

「聞くに及ばん。何人の人間に取り憑いたか知らんが、お前には消えてもらう」

青年はそう言うのと、叫びながら自分に向かつてくる悪霊に刀を一閃した。

光る刀を振るうのは、刹那。

剣撃が虚空に走り、ひとつに結った彼の長い黒髪が弧を描く。

少しの無駄もない、まるで舞のような洗練された動きで斬られた悪霊は、けたたましい叫び声をあげた。

『ぐおおお……！』

酷い金切り声に、綾子は両耳を塞ぐ。

『妬ましい、あやかしめ……！』　ようやく月光の神子を手にかげられるところだったのに……！

斬り捨てられてなお、恨みがましく納屋の中をぐるぐると回っている悪霊に対して、
「失せろ」

と冷やかに告げ、もう一度素早く刀を振るった。

刀が空を切る音が綾子の鼓膜を揺らす。

続いて、彼が鞘に青く光る刀を収めた音が響いたのと同時に、黒い影はその表情を歪めた。

目と口を大きく開けて苦しうにした後、断末魔の叫びをあげ、広がった黒い影は霧散して跡形もなく消えてしまった。

月夜に照らされた納屋の中に、帯刀した青年と、呆然としている綾子の二人きり。

悪霊に取り憑かれて命を奪われるところを、青い刀を振るう青年に助けられた。

頭が追いつかない。綾子は力が抜けてしゃがみ込んだままだったが、ふう、と息をついた青年がこちらを向いた。

初めてその二つの瞳と視線が合う。

青年は床板を踏み締め一歩近づくと、その場に膝をついた。

「無事か」

「は、はい」

声を上擦ってしまった。

そこでようやく青年の顔が見えた。

すつと通った鼻筋に、切れ長の目。整った顔立ちで、裾から覗く腕は鍛えられてい

てたくましい。

綾子は、先ほど恐ろしい思いをしたばかりだというのに、彼の姿を認めた瞬間、鼓動が高鳴るのを感じた。

「あの、あなたは……?」

このあたりでは見たことのない顔だった。恐る恐る素性を問う。

「俺は悪霊を討つことを生業なりわいとしている。この納屋なやから、悪霊の気配を感じた」

脇差の鞘を触りながら、青年はそう告げる。

悪霊とやらに取り憑かれる人を助けるだなんて、大した善行である。

綾子は呆然と彼を見上げていたが、青年は小さく唇の端を歪めて言った。

「本当に死にたかったのならば、止めて悪かったな」

青年の言葉に綾子ははっとする。

母と祖母の代わりに、私が死ねばよかった。二人のところに行きたい。

あの時、心から願ったのは確かだが――

悪霊が斬られた今、死ぬのがこんなにも怖い。

あの生暖かい霧もやに抱かれ、命を奪われていたかもしれないと思うと、恐ろしくて仕

方がなかった。

「……いえ、ありがとうございます」

綾子は、正座し三つ指をつけて命の恩人に頭を下げる。

何も返事がないので、ゆっくりと頭を上げると、目の前に青年の顔があった。

彼は手を伸ばし、綾子の顎にそっと指を置いて、瞳を覗き込んでくる。

「……この目は間違いない。『月光の瞳』だ」

真剣な顔つきの青年は、不思議な単語を放った。

「悪霊を見抜き、故ゆえに悪霊を吸い寄せる瞳。人間の身では、さぞかし今まで生きるのに苦労しただろう」

どくん、と綾子の鼓動が跳ね上がった。

幼い頃、祖母の背中に黒い影を見たことを皮切りに、寿命の近い町中の人に影が見えた。

母が死んだ時に、つけられた蔑称が『疫病神』。

あいつと関わりと取り殺されてしまう。不気味で不吉な疫病神。

そう言われて石を投げられ、虐められ、薄汚い納屋なやで過ごす人生。

なんで自分がこんな仕打ちに遭うのかと、何度嘆いて悔いただろうか。

彼の瞳に映る自分が、涙を流したのがわかった。

青年は綾子の顎から手を離し、頬を伝う涙を指の腹でそっと拭うと、告げた。

「しかし悪霊を討つ俺たちからすれば、その瞳は特別なものだ」

まっすぐな目と声で――

「ずっとお前を探していた。俺と共に来い」

その言葉は、綾子が求めていたものだった。

『強く気高い子になりなさい、綾子』

髪を撫でてくれた母の、優しく凛とした瞳と、彼が重なった。

すぐに頷いて返事をしたかった。

しかし少し思案した後、綾子はそっと首を横に振る。

「私と一緒にいると、あなたも不幸になってしまうわ」

悪霊を見抜き、悪霊を吸い寄せる瞳だとこの人は言った。

きつとまた、そばにいる大切な人を失ってしまう。

そんなことにはもう、耐えられないと思ったのだ。

「ならばお前に寄り付く悪霊も、お前に降りかかる不幸も、全て俺が斬ってやる」

そう告げた青年は、綾子に手を差し出した。

その強い言葉は、綾子の長年の苦悩を打ち壊す力があった。

薄暗く汚い納屋で暮らし、生きることに希望を見出せなかった綾子を、その太刀の一閃で助け、手を差し伸べてくれたことが嬉しかった。

心挫け、安らかな死を選んだ自分を救ってくれた彼を、信じてみようと思ったのだ。そうして、彼の手を握り返した。

青年は力強く綾子の手を引き立ち上がらせると、体を支えながら納屋を出た。

すっかり夜中になっていたらしい。静まり返った屋敷の中は明かりが消えており、皆眠っているのだろう。

手を離し通りへ歩き出した青年の広い背を追おうとしたが、綾子は頭の血の気が引いてよろけてしまった。

「大丈夫か」

「すみません。少し……気分が悪くて」

口を指先で押さえ、申し訳なさそうに綾子が呟く。

「悪霊の障気に当てられたのだろう。俺の屋敷で養生するがいい」

顔色が真っ白な綾子の肩を支えた青年は、次の瞬間、躊躇なく抱き上げた。

綾子は心の準備をしていなかったもので、急な彼の行動に息を呑む。

「……しっかり掴まっけていろ」

顔に息がかかるほどの距離で、腕に抱えられた綾子にそう忠告する。

すると次の瞬間、ばさ、と鳥の羽音のような音が聞こえた。

藍色の羽織を着た彼の背中から、黒く大きな翼が生えたのだった。

月明かりに照らされた黒翼が数回羽ばたくと、いとも簡単に夜空へと飛び上がった。

眼下に見える自分を長年虐めてきた義妹たちが住む屋敷が、どんどん小さくなっていく。

夜風が頬に当たる。妙な浮遊感を覚えながらも、綾子は青年に恐れは感じなかった。

おぞましい悪霊をたった一人で討ち取った彼の人間離れた強さは、「人ならざる

者」であっても、少しもおかしくないと思ったからだ。

皆が寝静まった町の上空を、黒髪をなびかせ羽織を着た青年と、彼に抱きかかえられた少女が横切っていく。

綾子は青年の首の後ろに手を回し、振り落とされないように力を込めた。

「あの。あなたの、お名前は？」

女一人抱き上げた体勢のまま、黒翼を羽ばたかせ悠然と空を飛ぶ青年に綾子が問う。

田んぼや瓦屋根を見下ろしながら、星空により近い場所。

「名前はない。ただ」

ばさり、と強く翼を打つ。

正面を向いたままの青年は、低い声で告げた。

「人間たちは、俺のことを土方と呼ぶ」

刀を振るい悪霊と戦う気高き彼の姿を、人々がかつて生きた幕末維新の英雄と重ねたのだろうか。

彼は、ふ、と息を漏らす。

笑ったようだった。

第二章 お手伝いさせてください

金木犀きんもくしの香りがした。

庭の向こうで微笑んでいる祖母と、優しく手招きする母の姿。

『お母さん、おばあちゃん！』

幼い綾子は手を振りながら、無邪気に二人の元へと駆け寄る。

しかし大好きな二人の姿はかき消え、義妹の絹江が意地悪な顔をして立っていた。蝶々柄の上等な着物を着て、目を細めて睨みつけてくる。

『この愚図ぐずが。あんたなんて生きてる価値のないよ』

綾子の髪を引つ張り、突き飛ばしてくる絹江。

ほくろのある口元を歪めて、膝をついた綾子をせせら笑って見下ろしてきた。

その後ろから、屋敷の者や町中の人たちが軽蔑したような視線を向けてくる。

疫病神、というひそひそ声が聞こえ、絹江の後ろには悪意が渦巻いていた。

綾子が顔を伏せたその時、ばさりと鳥の羽音と共に男性の声が聞こえた。

『ならばお前に寄り付く悪霊も、お前に降りかかる不幸も、全て俺が斬ってやる』

黒髪を一つに結い羽織を着た青年が、構えた刀でその幻想を断ち切る。

そんな、不思議な夢。

* * *

はつと息を吐き、綾子は目を開ける。

ひどい寝汗をかいており、何か悪夢を見ていたような気がするが、思い出せない。

寝起きの朧おぼろげな視界であたりを見回すと、掛け軸や襖ふすま、土間も記憶にない場所であつた。

自分の額には水に濡らし絞った布が置かれており、誰かが看病してくれていたことがわかる。

「あ、目を覚ましたね！ よかったよかった」
 明るい声がしたのでそちらを見ると、部屋を横切り一人の少年が近付いてきた。
 陽の当たる広い和室。その中心に敷かれた布団に横になっていた綾子のそばに座り、
 少年は笑顔で挨拶した。

「やあ、体の調子はどう？ だいぶうなされてみたいだけけど」
 色素が薄い栗色の髪をし、藍色の着物に袴を身に着けた少年は、綾子に聞きなが
 らその額の布をとり、横に置かれていた水桶に浸した。

「だいぶ、調子がいいです。あなたが看病してくださいだったのでですか」

「僕は隣で見張りをしていただけだよ。病に臥せている人には、悪霊が寄ってくる
 から」

悪霊という言葉聞き、綾子は昨晚の一連の出来事を思い出す。

虐められ、大切な簪をなくし、心を病んだ自分に取り憑いた、黒い霧。

自分はその悪霊を見抜き、吸い寄せる能力があるのだと言われたのだった。

綾子が布団から上半身を起こし、昨夜を思い出しながら呆然としていると、

「ま、目覚めたら教えてくれって言われたから、一緒に隣の土方さんの部屋に行こう」

説明はそこでするよと、あどけない童顔の少年はにっこりと笑って綾子を促した。

* * *

廊下を歩き、隣の部屋へと向かう。

梅花の香でも焚いてあるのか、あたりには甘い香りが漂っている。

その一番奥の部屋を、袴を穿いた少年は遠慮なく開けた。

襖の向こう、陽の射し込む広い畳の部屋に一人、黒髪の青年が座っている。

畳の上に置かれた座椅子にあぐらをかき、頬杖をついて気怠げに縁側を眺めている
 のは、昨日綾子に土方と名乗った青年だ。

もう片方の手には長い煙管を持っており、唇に沿わせて息を吸うと、ふう、と白い
 煙を吐いた。

何かを思案している様子だが、煙管を吸う姿も絵になる美丈夫である。

「失礼しまーす。土方さん、この子起きたよ」

明るい少年の声に目だけをこちらへ向けた土方は、白い煙を吐きながら頷いた。

「そうか」

短く返事をする。土方は煙管きせるを横の盆の上に置き、一服を終えたようだった。

彼が自分の向かいに敷かれた座布団を指差したので、ほら、と促してきた少年と共に綾子は部屋へ入り、遠慮がちに正座する。

「昨日は、助けてくださってありがとうございます」

綾子は、深々と頭を下げる。

「俺は役目を果たしただけだ。礼には及ばん」

あくまでも冷静に、土方は綾子に返す。

頭を上げて、土方と正面から目が合った。

何か言おうと思ひ、しかし数多くの疑問が頭の中を駆け巡る。

悪霊とはなんなのか。私の目を月光の瞳と呼んだ意味は。悪霊を討つ仕事とはどんなものか。

そして、昨日翼を羽ばたかせて優雅に空を飛んでいたが、あなたは何者なのか。

それらをどう聞こうかと綾子がまごついていると、隣に座っていた少年が助け舟を出してくれた。

「まずは君の名前を聞かせてよ。で、順番に僕たちに聞きたいこと聞いて。なんでも答えるからさ。ね、土方さん」

見つめ合い黙っている二人を取り持つため、少年は明るく言った。土方も小さく頷く。

「わたしは篠宮綾子と申します」

少年に言われた通り名前を告げて頭を下げる。

「ああ、篠宮家の娘さん？ 由緒正しき家柄なんだね、どうりで気品があると思つたよ」

少年は手を打ちながら納得する。

篠宮家は、このあたりでは有名な商家だ。母が死んでからは碌ろくな扱いをされていなかった綾子は、篠宮家を名乗るのさえ気持とがちが咎めた。

「あなたのお名前は？」

土方よりは歳が若そうな少年は、よく見ると袴はかまを着た脇腹に刀を差している。彼も刀を振るうのだろうか。

「僕に名前はないんだよ。でも人間たちは、勝手に『沖田おきた』って呼ぶんだ。だからそ

う呼んで」

昨晚の土方の言葉と同じ答えだった。

名前はない、だが人間たちは勝手に呼ぶから、好きにさせている、と。

土方も沖田も、聞き覚えがある名前だった。

幕末の激動の時代に生きた、維新の志士たち。

綾子は幼い頃、彼らの勇姿を描いた伝記を夢中で読んだことを思い出す。

土方歳三。仲間をまとめる才覚と、類い稀なる剣技を兼ね備えた、新選組・鬼の

副長。

凜とした佇まいと、言葉数は少ないが威厳のある雰囲気は、昨日助けてくれた彼

と似ているかもしれない。

そして沖田総司。若くして卓越した才能を持っていたが、薄命だった天才剣士。

いるだけでその場がぱっと明るくなる華やかな彼は、沖田総司の呼び名にぴった

りだ。「人間たちはそう呼ぶ、ということ、あなた方は人間ではないのですか」

綾子の言葉に、沖田と名乗った少年は土方の様子を窺う。

「昨日羽で飛んで帰ってきたし、隠すつもりはないんだよね、土方さん」

ぐつたりと腕力した着物の少女を抱え、黒い翼を生やした土方が空から屋敷に降り立ったのを見ていた沖田は、もうとつくに正体はばれているとわかっていたらしい。

ああ、と土方は肯定し、語る。

「俺たちはあやかしだ。お前たち人間にわかりやすく言うなら、もののけや妖怪だな」
ふう、と息を吐く。

「俺は八咫鳥のあやかしだ。黒い羽で空を飛ぶことができる」

土方の言葉に、綾子は目を丸くする。

昨日、夜空を羽ばっていた彼の翼はやはり見間違いでも夢でもなかったのだと、納得した。

あやかしという言葉は知ってはいたが、もちろん今まで目にしたことはない。

幼い頃に夜更かしをしていた綾子に、母親が「早く寝ないと鬼さんが来ちゃうわよ」と言っていたぐらいいだ。

子供を躰けるための架空の存在だと思っていたのだが、まさか目の前に存在するとは。

「霊力の強いあやかしは人間と同じ姿で、ほとんどは人里離れて隠れて住んでいるが、ごく一部は人間たちに混じって生活をしている。俺も以前は山奥に隠れていたが、訳あって今はこの屋敷で悪霊退治をしている」

土方は気怠げに語る。

「俺たちあやかしは人間と違って歳を取らない。人間と共に住むと、なぜ老けないのが怪しまれるのが鬱陶しいからな」

老いという普遍的な運命にある人間とは違い、老けないあやかしは確かに異質だ。土方は見た目は二十代半ばの青年にしか見えないが、その落ち着いた語り口から、何百年と生きているのかもしれないと綾子は思った。

それにしても、昨日の今日で頭が追いつかない。黒い羽で空を飛ぶ不老不死の八咫鳥のあやかしに助けられて、その屋敷に今いるなどと。

「はいはい、ちなみに僕はなんのあやかしでしょうか！」

頭が混乱してきた綾子の思考を打ち消す、明るい声。

元氣良く右手を挙げて、沖田が笑顔をこちらに向けてきた。

当ててほしくてたまらない、という様子だ。

「ええと、私が知ってるあやかしは、河童とかぬらりひょんとかしか……」

「全然違うよ！　じゃあ少し教えると、鼻が利く動物だよ」

沖田は自分の鼻を指差しながら、綾子に回答を促してくる。

薄茶色のふわふわした髪、大きな目に無邪気な性格。そして鼻がいいという特徴から、綾子は猫っぽいなと思った。

「鼻が利く？　猫……猫又のあやかし？」

「うわー惜しい！　でもあんな気まぐれで適当な性格じゃないもん。俺は狛犬だよ」

沖田は額を押さえ、あちやーとがっかりしていたが、問答形式のやり取りを楽しんだようだ。

確かに言われてみれば、ころころと変わる表情や人懐っこい性格は、まるで犬のようだ。

綾子が成程、と頷いていると、

「悪霊ってほんと、うざったくてさあ。嘔みついたり引っ掻いたりして倒したら、土方さんに見つかって、悪霊退治を手伝わないかって誘われたんだ。おかげでこんなに広い屋敷で三食昼寝付き。土方さんには足向けて寝られないよね」

沖田は手を合わせて土方にあざとく礼を言う。
 狢犬こまぬぬの彼は一人で自由に過ごしていたところ、その退魔の力を土方に認められた
 というこころらしい。

土方は片眉を上げ、呆れながら答える。

「調子のいい奴だ。……話を戻すぞ」

すっかり沖田のおかげで緊張した雰囲気は緩んでしまった。

置いてあった煙管きせるを長い指で掴み、ひと吸いして煙を縁側に向けて吐く土方。

紫煙がゆらめく。

「悪霊の正体についてだ」

低いけれどよく通る声。土方が目を伏せると、長いまつ毛が彼の頬に影を落とす。

「悪霊がなぜ生まれるのかは、まだ明らかになっていない。ただ、体や心が弱った人間に取り憑つき、生気を吸い、取り殺してしまふ悪しき存在だ」

苦々しく言う土方の煙管の煙が天井へと上り、綾子は昨晚納屋なやの中で見た悪霊を思い出した。

甘い言葉を囁ささやき、心を蝕むしむ黒い霧もや。生ぬるい霧きりに体を取り囲まれて、うまく頭が

回らなかった。

ぶる、と綾子は身震いをしてしまふ。

「俺たちあやかしは霊力を持っているから、悪霊を撥ね返すことができる。それで俺たちには悪霊は取り憑つかない。悪霊が狙うのは、人間だけだ」

その言葉に綾子は驚く。

あやかしの彼らが、恐ろしい存在に立ち向かうのは、悪霊に太刀打ちできる自信があるからなのだとわかった。

「さつと悪霊と僕らって、似たような存在なんだろうねえ」

霊もあやかしも妖怪もものけも、全部同じさ、と沖田。

実はそこかしこに密かに存在するけれども、人間からは見えない。理解し難い不思議な生き物。

議ぎな生き物。

それがあやかしのだろう。

土方は再び煙管きせるを置くと、横に控えてあった刀を手に取った。

黒塗りの鞘に、金細工の鐔つばの立派な刀だ。

両手でその刀を持ち、鞘から少しだけ抜き刃を見せる。

その銀の刃は、青色に鈍く輝いていた。まるで宝石の瑠璃を彷彿とさせる美しさである。

「この退魔の刀は、研ぐ際に俺の霊力を注ぎ込んでいるため、青く光っている。悪霊を消し去るには、これで斬るのが一等効くからな」

真つ暗な納屋の中、この青い刃が一閃し、悪霊を両断したことを思い出す。

悪霊は戦慄き、苦しげに叫んだあと欠片も残さず消えてしまったのだ。

「だから帯刀していらっしゃるのですね」

魔刀令が出て以降、民間人の帯刀は一切禁止されているはずだ。

軍人や警察官のみが許され、武士などの士族はもはや所持することも許されていない。

綾子も帯刀し戦う人を見るのは初めてだった。過去の偉人たちの戦や、切り開いてきた歴史を、なんとなく知ってはいたが。

「目立ちませんか。警察に咎められたり」

銃剣を持っている者は、違法だと罰せられるはずだ。

綾子の不安げな様子に、沖田は笑って首を横に振り、土方は刀を鞘にしまふ。

「十数年前、役所で流行病が蔓延した。たちの悪い悪霊が、大人数に一気に取り憑いたからだ」

當時を思い出しているのか、悲惨なものだったと土方は眉を擡める。

「隔離され死を待つ患者たちの病室で、俺はその悪霊を斬った。皆が眠りについた時を見計らったんだが、運悪く起きていた患者の一人に見られてな。翌朝、除霊されてすっかり回復した奴らに、英雄扱いされてしまった」

大袈裟なもんだ、と土方は息をつく。

「俺が八咫鳥のあやかしだというのも、悪霊の存在も、役人たちは信じた。そしてそれ以降、いわくつきの事件や事故が頻発する場合は、悪霊の仕業じゃないかと俺に相談してくるようになった。討ち祓ってくれ、とな」

悪霊を見ることができない人間にとって、見つけ、退治できるあやかしの存在は貴重だったのだろう。彼らの助力が喉から手が出るほど欲しかったに違いない。

「その報酬に、この広い屋敷や食うに困らない賃金は保証してもらってるんだよねえ。そんな僕たちの帯刀を怒る役人なんていないよ」

沖田はぐるりと部屋を見回し、自慢げに笑う。

豪勢な屋敷だ。江戸時代から何代も続く、由緒正しき名家の住むような家に彼らがいる理由がこれでわかった。

どんなに金を積んでも、役人たちは彼らをそばに置いておきたいのだろう。不吉な悪霊を倒す義勇軍と、平和を維持するために彼らを囲い込むお偉いさんたち。「本来ならば町の平和を守るはずの政府や役人たちが、得体の知れないあやかしに頼って悪霊を倒しているなど世間体が悪いから、ほとんどの一般人は俺たちの存在を知らない。だからお前があやかしの存在を知らなくても無理はない」

唯一、悪霊に憑かれていた者だけがあやかしの能力を目にするが、瘴気を受けて記憶が曖昧だつたりするしな、と土方が続けた。

「そう、僕たちは人知れず人間を救う、正義のあやかし新選組ってわけさ！」
 けらけらと笑う沖田と、腕を組み目を細める土方。

綾子にとって、彼らはとても頼り甲斐がある存在に思え、頬が自然とほころぶ。しかし一方で、疑問も浮かぶ。

土方が語った悪霊とあやかしの説明の中で、唯一解せなかった部分。

「あの」

綾子は、つい言葉が出てしまったことに焦り、言おうか悩んだが、二人の視線が自分に向いたので、膝の上に置いた手をもじもじと動かしながら、尋ねてみた。

「悪霊はあやかしに取り憑くことはないのでしょうか？ ではなぜ土方様も沖田様も、退魔の刀を振るっているのですか」

綾子の問いに、土方が怪訝そうに聞き返す。

「どういう意味だ」

「人間が死ぬのなど、放っておけばいいではないですか」

だってあなたたちは、あやかしのだから。

何百年も生きるあやかしたちにとって、数えきれないほど存在する人間が生きようが死のうが、どうでもいいはずだ。

悪霊と戦い、自らが傷つく危険を冒してまで、人助けをするなんてなぜなのだろう。綾子の台詞に、土方と沖田は一瞬言葉を失って顔を見合わせていたが、

「あは、確かに！」

たまらず噴き出した沖田が、けらけらと笑い声をあげた。

素晴らしい行いだと褒めるわけでもなく、人間を助けてくれてありがとうと感謝す

るわけでもなく。

自分と違う存在を、どうして救うのかを不思議に思う、綾子のある種の冷静さに驚いたようだった。

親族に虐げられ、納屋で暮らし、自分が生き抜くために他人など構っていられない生活を送ってきた綾子にとっては、人のために善行を重ねる彼らが遠く感じられたのだった。

綾子のまっすぐな疑問に、沖田はいとも簡単に答える。

「単純な理由さ。優しいんだよ、土方さんは」

ひとしきり笑い終わった沖田が愉快そうに言い、土方の肩を小突いた。

ばつが悪そうな土方は口をへの字に曲げて腕を組む。

「……押揃うなよ」

土方は頭を掻き呟いた。もしかしたら照れ隠しなのかもしれない。

そんな彼を見て、きつと心根の優しい人なのだろうと、綾子はほっと唇を緩めた。

この人たちなら信じられるかも、と胸を撫で下ろす。

「おやあ、お嬢さんがいてはりますなあ」

三人の会話が落ち着いた時、新たな声が聞こえてきた。

襖を開けて立っている青年は、普段男だらけの屋敷に女がいることに驚いたらしい。

色白で細目、細身ですらりと背が高く、藍色の羽織に袴を着ている。

そしてその腰には土方や沖田と同じく刀を差しているので、彼も特別に帯刀を許されている、この「あやかし新選組」の一味なのかもしれない。

その男はずんずんと遠慮なく和室に足を踏み入れると、無造作にしゃがみ込み、正座している綾子の顔をまじまじと眺める。

「へえ」

気の抜けた声をあげ、綾子の髪や目、うなじや肩回りを見たあと、にこりと笑う。

「可愛らしいねえ。お兄さんと遊んでくれませんか？」

「えっ？」

このあたりでは珍しい京言葉を使う青年になんと返事をしていいかわからず、綾子が慌てていると、土方がため息をついた。

「気をつける。そいつは大層な女たらしだ」

座椅子に肘をつき、しっし、と手を払う。

「ひどいなあ土方さん。そないなことないですよ」
 「どうせ昨晚も花街にでも行っていたんでしょ、齋藤さん。白粉おしろいの匂いが服についてるよ」

土方に愛想笑いをしていたが、沖田の鼻は誤魔化せなかったようだ。

男はどうやら朝帰りらしい。沖田が口を突らしているが、どこ吹く風だ。

「いけずな狢犬こまいぬちゃんやなあ。ほんま鼻だけはいんやから。鼻だけは」

齋藤と呼ばれた男は、笑みを浮かべたまま沖田の鼻を摘んでひねる。

「いててて！ やめろよ！」

大きい声をあげる沖田と、意地悪な笑みを浮かべる齋藤。

二人はどうやら仲が良いようで、このようなじゃれ合いを普段からしているのが窺えた。

「あれ、綾子ちゃんが笑ってる！」

摘まれて赤くなった鼻をさすっていた沖田が、綾子のことを指差したので三人の視線がこちらへ向いた。

「あ……」

自分でも笑ったことに気がつかなかった。仲睦なかつむましい様子を見て、思わず笑みがこぼれてしまったのだ。

ずっと真剣な顔をしていた綾子の不意の笑顔に、土方も興味深そうにしていた。

沖田と向き合っていた齋藤は綾子の方を向き、照れている彼女に微笑みかける。

「ほんまに愛らしいお嬢さんやな。僕は齋藤と呼ばれております。ひとつよしなに」

齋藤と名乗った細目の青年は、笑うと目がなくなるのが特徴的だった。

「よろしくお願いします。新選組の齋藤はしむら一様からとって呼ばれているんですか？」

綾子が挨拶をして尋ねる。

「そやねん。飄々ひょうひょうとしてるところが似てるねんで。それより僕らのことよう知ってはりますな。彼女、土方さんのこれですか？」

齋藤は小指を立てて土方にかざすが、土方は首を横に振る。恋仲なのかと聞いたのだろう。

「僕は妖狐のあやかしゃねん。人に化けるのがうまいんやで。よろしゅうね」

あやかしだということを隠しませず、齋藤はにんまりと笑う。

「お腹減りましたなあ。お客さんもいることやし、蕎麦そばの出前頼みましましよ、土方